

長野県図書館大会「生涯にわたり学びを支える図書館の在り方」

記念講演「大切な図書館を充実させるには—地方自治から図書館を考える—」

講師 片山 善博 氏（早稲田大学公共経営大学院教授・元鳥取県知事）

鳥取県知事時代、自立再生を推進するにあたり、重点として「知の地域づくり」を掲げた。「知の地域づくり」に必要なものとして教育、科学技術、歴史、文化、芸術等があげられる。学校教育だけでなく、生涯にわたって自ら学び自らを高める地域社会にするために、図書館は重要な位置を占める。

この図書館の運営を担っているのは地方自治のシステムである。しかし、団体自治の観点からも、住民自治の観点からも、システムが十分に働いているとは言えない。図書館を管理運営するのは教育委員会だが、鳥取県では、この教育委員会自体が財政面で委縮し、遠慮しているという傾向があった。

「知の地域づくり」のために教育委員会がもっと堂々と主張すべきは主張して、必要なところに予算が行き届く環境を作っていかなければならないと考えた。学校へ足を運び、教員の話に耳を傾けながら、少人数学級の導入や教員定数等の問題の改善に取り組んだ。遠慮をせずに、きちんとものを言わないと行政、自治体は動いていかない。教育委員会の意識改革を促したということである。

ただ、その教育委員会で図書館はいわば端っこに置かれている存在であった。そこで図書館に熱意と関心の深い人を教育委員に送り込むなどして、教育委員会において図書館政策を主体的に充実させるよう働きかけた。その結果、例えば3か年計画で県立高校に司書を100%配置したり、その成果を市町村長さんに示すことで、市町村での司書の配置も100%に近くなったりしたことである。これらは教育委員会の意識改革で進んだことである。

地方自治の中で議会は重要な機関である。しかし、一般的に議会は、公共事業や産業行政に関心が高いけれども図書館には関心が低い。「知の地域づくり」を目指す上で、議会には学校教育、図書館行政に関心を持ってもらいたいと率直に話した。

アメリカでは議会がイニシアチブをとって市民の願いをすくい上げ、図書館を充実させている自治体もある。議会が民意をくんで様々なアイデアで政策に反映させる。これからの日本の地方議会でも、こうした取り組みが求められる。

自治体の財政の分類・分析の手法として投資的経費と消費的経費という分け方がある。投資的経費は「将来への投資」という意味合いがあるのに対して消費的経費には「無駄遣い」という意味合いが込められているような印象がある。投資的経費とは道路やトンネル、箱ものを作ること、消費的経費には例えば図書館の書籍購入費や司書の給料などが含まれるが、この消費的経費が投資的経費より劣っているという見方はずれている。確かに昭和30、40年代の日本が物不足の時代であった頃は、交通基盤整備をすることで人の動きや生産性が高まるところがあったので、投資的経費はとりわけ重要だった。しかし今、社会は成熟した。成熟社会では福祉や教育が重要であり、それは人によって担われるのだから、消費的経費は以前より増えて当たり前であり、これまでの固定観念を変えなければならなくなっている。

また、地方分権を進めていかなければならないのに、最近では中央集権的色彩が強まっている。例えば3年前から始まった「地方創生」は、国が号令をかける中央集権そのものである。また、国が主導する中央集権的行政改革は必ずしも強制ではないのだが、これにより図書館の人員削減などにつながっている面もある。国に右往左往させられるのではなく、何ごとにも主体的に取り組めるよう地方分権をもっと進める必要がある。

「知の地域づくり」のためには図書館が知の拠点になる必要がある。長野県では「学び」を前面に出した県政を展開されるということだが、長野県でもぜひ、図書館を一つの知の拠点にしていきたい。

対談 片山善博氏、阿部守一長野県知事
テーマ 「地方自治と図書館」
コーディネーター 県立長野図書館長 平賀研也

◇ 片山元知事の講演についての感想

阿部守一長野県知事

長野県は新しく5か年計画を策定している。「学びの県づくり」を中心概念とし、サブタイトルを「学びと自治の力で拓く新時代」と考えている。片山知事がかつて鳥取県で実施したことと非常に近い。先ほどの住民自治、団体自治の観点から、皆様には長野県、あるいは市町村がやっていることに関心を持っていただきたい。パブリックコメント等、意見を求める場を設けている。知らないうちに図書館の予算が削られていた、ということにならないように、皆様から声をあげていただきたい。

長野県でも教育委員会の遠慮を感じる。教育委員会の予算の充実は、今、知事の立場でやらなければならないことと思っている。

私は図書館を重視している。平賀さんに県立図書館長をお願いしたことに、それが表れている。県民の皆様にご意見をいただきながら、平賀館長とも相談して長野県全体を発展させていきたい。

◇ なぜ今、知的立国、あるいは「学ぶ」ということが県政の段階でもクローズアップされるのか。

片山善博氏

以前の鳥取県はいわば土建立国だった。公共事業関係の予算はスッと通る。図書館や教育の予算はその逆だった。自ずと教育などの分野は委縮していく。これではいけないと考え、「知」を基軸とした「知の地域づくり」を掲げた。

阿部守一長野県知事

私は「学びの県づくり」が重要と考えている。世の中は、これまでの工業社会から情報社会、知識社会に変わってきている。中央集権的なシステムによる画一的な教育は、均質な人を育て、効率的に生産性を上げるという意味で、工業社会に適合していたのかもしれない。これからの時代は、大人も常に学び続けないと世の中の変化や先を見通した取り組みができなくなっていく。

片山善博氏

新しい科学技術、新しい文化を生み出すために一番の基礎となるのは創造性だ。

これを養うには芸術、文化の力が大きい。ゼロ・無のところに自分の力を加えて何らかの成果を作り出す、というのが創造性の基礎である。教育において芸術科目をもっと重んじる必要がある。

もう一つ、創造性を養うのに必要なのは読解力である。これは自分の中でさまざまな知識や情報を総合化して、自分の成果品として新しく知を生み出すことである。いろいろな科目、分野に共通する基礎だ。これを培うためには読書が重要である。

◇ 図書館はどう関わっていくか。

片山善博氏

学校教育は重要だが、全部をカバーすることは難しい。学校教育の使命は、学校を出ても自らに内燃

機関をもって知的エネルギーを絶やさず、そういう知的自立をした人を育てることである。そして社会に出たときに知的自立をして自らを高めていくために公共図書館が重要な役割を果たす。図書館は地域の知の拠点である。県庁の職員や議員も知的自立をしなければならない。そんな意味から県庁内に図書室を作ったり、議会図書室をよみがえらせたりした。図書館は万人の知的自立支援の拠点である。

阿部守一長野県知事

私は図書館に期待していることがある。人が学ぶことに喜びを見出せるように、学校図書館の関係者の皆さんには、子どもたちの好奇心をかき立て、好奇心を満たすようなアドバイスをしてもらいたい。また、学校の中の図書館には、多様性を尊重してあげる場になってほしい。そして、様々な学びのコアを県立図書館や地域の図書館が担ってもらいたい。

◇ 長野県の図書館関係者の皆様に、こういう図書館を目指してもらいたいという願いは。

片山善博氏

子どもたちに、ぜひ読書の喜び、楽しみを伝えていただきたい。終生図書館を活用できるよう、活用法も伝えていただきたい。ネットもあるが、深く物事を考えたり深めたりするのは、著者との対話による読書が一番良い。本とネットのすみ分けを教え、読書を通じて人生が豊かになる、本に興味を覚える、読書の喜びを感じるといった成功体験を積み重ねるようご指導をいただきたい。

阿部守一長野県知事

学びの県づくりでは、図書館関係者の方々にご協力いただきたい。長野県庁自体も学ぶ組織に転換させていかなければならないと感じている。自立、自治と図書館は密接な関係がある。長野県が自立的に発展していくうえで図書館の存在は非常に重要である。